

<定例研究会報告要旨>

第 1673 回（4 月 9 日）

中国の食糧需給見通しに関する一考察

池 上 彰 英

アメリカの著名な民間シンクタンクであるワールドウォッチ研究所長のレスター・ブラウンが、1994 年秋に「だれが中国を養うのか？」と題する論文を発表し、中国の長期的な食糧需給に関するきわめて悲観的な見通しを示して以来、中国の食糧需給問題が世界的な関心を集めるに至っている。

ブラウンの議論を簡単に要約すると、中国は今後人口増加と所得上昇にともない穀物需要が増大する一方、工業化・都市化の進展による耕地減少や灌漑用水不足、環境の悪化などによって穀物生産が減少するので、21 世紀には穀物の輸入超大国になるというものである。

ブラウンの予測によれば、2030 年の中国の穀物不足量は、一人当たりの穀物消費量が現在と同じ 300 kg 弱にとどまった場合でも 2 億 1600 万トンに達し、一人当たりの消費量が現在の台湾並み、あるいはアメリカの半分の水準である 400 kg まで増加すれば、3 億 7800 万トンという途方もない規模に増大する。現在の全世界の穀物輸出量を合わせても 2 億トン余りにしかならないから、穀物輸入大国となった中国を養える者は誰もいない。その時、中国の食糧不足は世界の食糧不足になるというのである。

折しも、中国は米とトウモロコシの輸出を停止するとともに、大量の輸入を開始しつつあった。94 年に約 400 万トンの食糧純輸出国であった中国は、昨年一転して 2000 万トン近い食糧純輸入国に転落した。93 年秋から上昇を開始した中国国内の食糧自由市場価格は、昨年秋までの 2 年間で約 2 倍となった。

中国の輸入増加も一因となって、95 年夏以降、米、小麦、トウモロコシなどの国際穀物相場は軒並み急騰している。

ブラウンは 95 年に出版された、先の論文と同名の著書のなかで、94 年という年を中国が「基本的に自給自足できていた時代から、輸入穀物への依存の増大への転換を画する年になるだろう」として、中国「食糧危機」の始まりを暗示している。

それでは、現在の中国は本当にそのように深刻な食糧不足に直面しているのであろうか。そして、近い将来、たとえば 21 世紀初頭に「食糧危機」が中国を襲う可能性があるのか。答えはいずれも「否」である。ただし、第 2 の点については、全く問題がないというわけではない。

昨年の中国の食糧（穀物のほか豆類・イモ類を含む）生産は 94 年を約 2000 万トン上まわる 4 億 657 万トンという史上最高の大豊作となり、高騰が続いていた食糧自由市場価格も、秋以降ようやく落ち着きを取り戻しつつある。穀物貿易の動きをみると、たしかに夏以降米の輸入ペースが鈍化している。小麦とトウモロコシの輸入意欲は秋以降も衰えていないが、その一部は一時減少した政府在庫の積み増しに向けられたと考えられる。ブラウンの描く「食糧危機」は今のところ影も形もない。

ただし、昨年の中国の食糧貿易の中味を仔細に検討すると、将来の食糧需給を考える上で大変気になることがある。近年アメリカに次ぐトウモロコシの大輸出国であった中国が、トウモロコシの輸出をほとんど行わなかったのみならず、逆に 500 万トンを超えるトウモロコシの大量輸入を行った点である。さらに、近年における大豆輸出の傾向的な減少や、大豆ミール（飼料原料）の輸入の増大も、新しい動きとして見過ごすことができない。

こうした食糧貿易構造の変化は、ブラウンも指摘するように、中国における畜産物消費

の増大が飼料穀物需要を急増させていることを反映している。今後の中国は再びトウモロコシの大輸出国として国際貿易市場に登場する可能性が薄いのみならず、引き続きトウモロコシの輸入国であり続ける公算が強い。大豆についても、遠からず純輸入国に転落する確率が高いであろう。

昨年9月の中国共産党第14期5中全会における李鵬総理の報告は、2000年の食糧生産目標を、事実上これまでの5億トンから4億9000万トン（努力目標は5億トン）に切り下げるとともに、限定的な形ながら食糧輸入を行うことを明言している。

中国政府が93年に発表した2000年食糧需要予測（ないし消費目標）が5億2000万トンであったことからすれば、政府は生産計画を達成しても、なおかつ2000～3000万トンの食糧輸入が避けられないであろうことを覚悟していることになる。この輸入量は、中国にとっては国内需要量の4～6％程度に相当するに過ぎないが、3000万トンといえば現在世界最大の穀物輸入国であるわが国の輸入量に匹敵する。

とはいえ、今後も畜産物消費の急増にともなう飼料穀物需要の増大が続くと予想されるなかで、また供給面においても工業化が農業に与えるマイナスの影響が増大すると考えられるなかで、2000年の食糧不足を2000～3000万トンの範囲に抑えられれば、むしろ立派な成果と言わなければならないであろう。中国の輸入の大宗が、国際貿易規模が比較的大きい小麦とトウモロコシであると考えられることからすれば、国際市場への影響も決定的に大きいとは思えない。

ブラウンを除けば、2000年の中国の穀物輸入量に関する外国機関の予測も特別深刻なものではない。たとえば、世界銀行によるそれは1100万トンであり、わが国の海外経済協力基金（OECF）は2400万トン、最も多い国際食糧政策研究所（IFPRI）による

ものでも4000万トンでしかない。

ところが、これが2010年の予測となると見方は全く分かれる。世界銀行は2200万トンという予測をしており、IFPRIはほぼ2000年並みの4300万トンとしているが、OECFは1億トン以上増えて1億3600万トンになるとみている。

これらの機関の需要予測はほとんど一致しており、生産量の伸びを高く見積もるか低く見積もるかによって全く異なった結論が導き出されている。ブラウンのように生産量が減少すると仮定すれば、より極端な結論が導き出せることは言うまでもない。

大事なことは、彼らの予測数字の不足量が大きいのか小さいかにあるのではなく、食糧の消費は確実に伸びるが、生産は農民や政府の努力がなければ増えないと言うことにある。そのことを抜きにして、15～35年も先の中国の食糧不足の数字の大小に一喜一憂するのは、全くばかげている。

ブラウンやOECFが中国の食糧不足について「過大」な見積りをした真の理由は、中国の高度経済成長が将来的に農業の疲弊と環境の悪化をもたらしかねないことを事前に警鐘し、中国政府の農業開発への関心を喚起することにあったのかもしれない。

幸い、中国政府は現在こうした期待に応えようとしているように思われるが、食糧増産に膨大な研究開発投資やインフラ投資が必要である以上、国際機関などの協力も重要であろう。ブラウンの言うように、中国の食糧不足がただちに世界の食糧不足になるのは、間違いない事実だからである。